

自閉症の観点から見た社会倫理の問題

中野 眞

はじめに

自閉症は子供の社会性の欠陥をきたす発達障害である。自閉症 (autism) とはこれまで一般に、「自分だけの世界に閉じこもる内面優位の病的精神状態」というように理解されることが多かったが、このような理解は正しくない。自閉症児とは自分だけのまとまった世界に住んでいて、外の世界との接触を拒否するといった子供ではない。この障害は自分の持つ感覚や感情等を外の世界に定位することが出来ないというものである。自閉症児は自分の体験を他者と共有して、共に喜び、悲しんだり、また他人の立場に立って自分の行為を考えたりすることが出来ない。その社会性の欠陥は特異なあり方をしている。

自閉症は最近では犯罪との関連で話題になることが多い。少し前までは自閉症は犯罪に関しては被害者として問題になることが多かったが、最近では自閉症の一形態であるアスペルガー症候群の認識が高まるにつれ、状況が変わってきた。特にここ数年10歳代から20歳代によるいわゆる動機不可解な凶悪犯罪が次々に発生し、それらの犯人の多くがアスペルガー障害者であると診断されるに及んで、むしろこの広い意味での自閉症が犯罪と結びついたものとして語られる場面が(特にマスコミ等で)多く見られるようになった。アスペルガー障害が本性において犯罪傾向と結びついていることは専門家の間ではっきりと否定されているが、犯罪とある特異な意味で結びついていることも指摘されている。

このような自閉症児における社会性欠如のあり方を見て行くと、これはごく一部の発達障害者の問題に留まらず、ひるがえって一般人の社会性とは何かについて、興味ある問題を投げかけているようにも思えるのである。以下まず自閉症とはどんな障害か、それは犯罪とどんな関係を持つかを見、さらにその障害のあり方が、逆に一般者の社会倫理に対して提起する問題を考察したい。

1. 自閉症とは何か

(1) 自閉症の歴史

初めて自閉症という言葉を使ったのは1943年アメリカの児童精神科医レオ・カナーであった。カナーはある奇妙な行動パターンを持つ子供を自閉症と名付け、その診断基準を設定した。その主なものは「他者との情緒的接触の重篤な欠如」「物事をいつも同じままにしておこうとする強い欲求」「コミュニケーション

ンに役立つ言葉の使い方」などであった。ところが40年後の1981年イギリスの自閉症研究者ローラ・ウィングは上の診断基準を部分的に満たす子供が、これを厳密に満たす子供の数倍存在することを発見した。知能が高く、コミュニケーションの障害は殆どないが、本性的に自閉症である子供が多くいることが明らかになったのである。そしてそれはアスペルガー症候群と名付けられる。ⁱ ウィングはこのように広範な障害として捉えられた自閉症全体を「自閉症スペクトラム」と呼んだ。ⁱⁱ この新しく規定されたアスペルガー症候群の基本的な特徴は① 社会性の障害 「対人反応性、相互性の障害」② 想像力の障害 「行動と精神活動の限局化、強迫的傾向」とを主徴とする生まれつきの障害であるとされている。

自閉症の原因は親の育て方にあるなどかつては言われたこともあるが、現在ではこれを脳の器質的損傷に求める研究者が殆どである。しかしその部位やどのように損傷されているかは未だ明らかにされていない。

以下社会性の障害と想像力の障害とは具体的にどのようなものかを見ることにしよう。

(2) 社会性の障害

精神医学者の磯部潮氏はこの障害を「状況への認知の歪み」と性格付けしている。自閉症児は他者と自分の体験が共有できない。つまり「自分の体験と他者の体験が重なり合うという一体化を経験できないために、他人の立場に立って考えることが出来ない。」ⁱⁱⁱ 彼らは他の子供と上手く遊ぶことが出来ない。遊ぶときの暗黙のルールを理解し、例えば順番が入れ替わったり遊具を交互に使ったりということが出来ない。彼らには他者との情緒的接触が欠如しており、「いわゆる行間の理解とか微妙な言い回しとか皮肉、当てこすりといった言語外の意味理解に困難を持つ」という説明もある。^{iv} また彼らは感じたことをそのまま言ってしまう。髪の毛を切ってきた女の子に対して普通なら「髪の毛を切ったね」などと言うところを、ある自閉症の子は「変な髪形」と言ったという。(磯部 43 頁) また彼らの特徴に、人の言葉をそのまま受け取るということがある。ある自閉症児は「離れて住んでいるおばあちゃんに、いつでも遊びに来ていいよと言われて毎日のように遊びに行き、おばあちゃんが疲れ果ててしまった。」(磯部 30 頁) また例えば理屈では悲しい出来事であることが分かっているにもかかわらず、感情としては表現することが苦手であるということがある。彼等は「我々が他者の心理を直感的に読むのとは異なって、いわば推論を重ねて苦労しながら読んでいる。」^v 「レッ

サーパング事件」の犯人(自閉症とされる。)について、母親の死亡時の彼の様子について次のような報告がある。弁護人が「お母さんが亡くなったとき、涙を流して泣いたのか」と尋ねると、彼は「一切ないですね」と答えた。また葬儀に出席した学校の教師も、彼は「普段と何も変わらず、泣いているとか悲しんでいるとかショックを受けているようだ」という様子はなく、いつもの彼だった、と言っているという。(佐藤、117頁)

現在自閉症の診断基準として、アメリカの精神医学会の「DSM-」が一般的に使われているが、これによれば社会性の障害は次のように規定されている。(磯部 61 頁より)

- 「以下のうち少なくとも二つにより示される対人的相互反応の質的な障害
1. 目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調節する多彩な非言語的行動の使用の著明な障害
 2. 発達の水準に相応した仲間関係を作ることの失敗
 3. 楽しみ、興味、達成感を他人と分かち合うことを自発的に求めることの欠如(例、他の人たちに興味のあるものを見せる、持ってくる、指差すなどをしない。)
 4. 対人的情緒的相互性の欠如」

(3) 想像力の障害

自閉症児は「物事をうまく概念化できず、物事を全体的に把握したり、抽象化したりするのが苦手」であって、「目に見えることしか理解できない。」(磯部 29 頁)それはまるで「デジタルカメラのファインダーで世界を切り取ったようなもの」である。(同上)日常のことについては、一度出来たパターンを崩すことを極度に嫌う、特定の言葉に固執する、などの態度が見られる。自分のなじんだものがなじんだ位置にないとき、また朝の時間がなくて歯磨きとトイレの順番が変わったときにパニックを起こすなど。彼らは同一性保持のための強迫的欲求を持っている。一方視覚、聴覚などの感覚に関してはある特定のものに過敏で、その他のものには鈍感である、という極端な偏りがある。一般人のように社会生活上必要な音を聞き取り、そうでないものは聞き流すという「選択的感受」が苦手である。多くの自閉症者は「輝いたり、キラキラしたりするものに魅入られる」という。(磯部 99 頁)

これらの点について前述の DSM- はつぎのように規定している。

「行動、興味および活動の限定的、反復的、常同的な様式で、以下の少なくともひとつによって明らかになる。

1. その強度または対象において異常なほど、常同的で限定された型の一つまたはそれ以上の興味だけに熱中すること。
2. 特定の、機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである。
3. 常同的で反復的な衝動的運動。(例、手や指をパタパタさせたり、ねじ曲げる、または複雑な全身の動き)
4. 物体の一部に持続的に熱中する。」

(4) 自閉症の仕組み

自閉症者の心の中ではどうということが起こっているのだろうか。このことを理解するために、いくつかの興味深い説明を見ることにしよう。

まず心理学者の酒木保氏の「自分をまとまったものにする能力の不足」という説明である。^{vi} これによると自閉症者の本質は「私」としての自己を他者に対して定位することのできない存在構造」にある、としている。「自己を他者に対して定位」するためには、自己が他者からの侵入によって抹殺される不安、恐怖のない状態にあることが必要である。ところが自閉症者の場合、他者の侵入の不安のために、防衛手段として対人関係を拒否する。例えば自閉症者は相手と顔を上げて正面から対面できない。これは正面から対面すると、相手に自分が囚われてしまい、自分を相手に対して定位できないという不安からであり、その結果「周辺視野で相手を捉える」「斜に構える」ことになる。

酒木氏によると「自己」とは予め一つにまとまった実体ではなく、むしろ「ばらばらになっている要素的な自己(感覚、感情、身体部分など)を、その都度一つの自分自身にまとめること」で自己を定位するものだという。そしてこうしてまとめられた自己によって世界と関わって行くことが、世界に対する自己定位である。一般に発達段階の子供は、このような定位の仕方を習得する過程にあるが、自閉症児の場合はこの要素をまとめるという機能に問題があるということである。

別の説明として自閉症者は普通の人々が持っている五感における選択的注意の能力を欠いている、というものがある。「われわれの知覚は強い選択性をもっている。特に目の前の人間が出す情報に自動的に焦点が合うという強い傾向があり、重要な情報以外の雑音は自動的にフィルターにかけられて除去されてしまう。ところが自閉症の場合、このような自動的な対人情報の絞り込みや、不要な雑音に

対するフィルターがきちんと作動しない。チューニングの悪いラジオを聴いているようなものだ。」(磯部 25 頁)「選択的注意」は生活する上で役立っているものであり、人類が進化の過程で獲得したものであるが、自閉症児はこのことが出来ないというのである。

さらに別の説明は同様のことを「知覚の社会性」として捉える。我々は周囲の光景を目にし、周囲の音を聞きながら、身も心も安定してここにいることが出来る。それは我々の感覚が生まれてから長い時間をかけて、人とのかわりを通して身に備えてきたものであって、それだからこそ不安を覚えることなくそれらの中にいることが出来るのである。「私たちは知覚の大半を意味として捉えなおしている。目に映るものも、耳にするものも、知覚すると同時に意味化＝言語化している。そしてその意味を通してその知覚情報を価値づけ、世界をかたちづけている。」「刺激の束をそのように捉えなおすことによって、私の世界は安定(秩序化)を得ている。」(佐藤 94 頁)滝川一廣氏は人の知覚受容のあり方を精神発達の過程で次第に分化してきたものであり、文化的な所産であるとしている。自閉症者は「まわりの世界を共同的な普遍性の相のもとに認知して秩序化する心の発達が遅れるため、彼らはまわりの世界をそのつどの直接体験(直接知覚)に依存して認知せざるをえない度合いが高い。」(佐藤 96 頁より)

一方このことは逆に一般人が捨て去ってしまった情報の中に、自閉症者が人間にとって新たな価値を持った情報を発見するという肯定的な可能性を秘めているという指摘もある。(磯部 34 頁)

2. 自閉症と犯罪

(1) 概観

冒頭にも述べたように、アスペルガー症候群は現在マスコミなどでは犯罪との関連で話題になることが多い。これについての専門家の発言はおおむね次のようなものである。「アスペルガー障害者が犯罪に走りやすいとか、健常者に比較して危険性が高いということではない。ただアスペルガーの犯罪、非行には特異な特徴を示すものが時に見られる。」^{vii} 「高機能者(主にアスペルガー)の犯罪は、稀にはあるものの、生じたときは非常に「共感が困難な」突き抜けた犯罪となることが大きな問題である。」(杉山 46 頁)「動機がわかりにくかったり、どこかしら奇異な印象のある非行事例の中には広範性発達障害(アスペルガーを含む)を鑑別する必要がある事例が含まれている。」^{viii} ちなみに最近生じた重大事件で被疑者が自閉症スペクトラムと診断されたものをいくつか挙げてみる。99 年東

京湾上空の全日空機ハイジャック・機長殺害事件、00年愛知の主婦殺害事件、01年東京のレッサーパンダ帽事件、03年長崎の幼児誘拐殺害事件、04年長崎の同級生殺害事件その他である。当稿は自閉症と犯罪の関係をテーマとするものではないが、ここには彼らの言動の特異な点がよく表れていると思われるので、以下犯罪をめぐる事実にも触れておきたい。

(2) 犯罪の特異性(その一) 対人反応性、相互性の障害

十一元三氏は触法行為を行ったアスペルガー障害者の特長について次のように述べている。「単独犯、事件の悪質さと対照をなす被疑者の人物像、供述に対する抵抗のなさ、事件後の淡々とした態度や様子、審判での有利・不利等が眼中にないかのような言動。」「悪意や反社会的意図というよりも、特殊な個人的動機や一見奇妙な理屈にもとづいている。」^{ix} 要するに彼らは「罪を問われてもどのような意味で悪いことをしたかについて、きちんと理解していない。」(大石剛一郎氏)
x 「自分の行為が犯罪であるとは理屈の上ではわかっている、犯罪を行った自分が人々から非難を受ける犯罪者になるという実感が無いようだ。(藤川洋子氏)

xi

次はレッサーパンダ事件の公判におけるやり取りの一部である。(佐藤 204頁)場面は女性を刺殺した動機について検察官が被告の供述書にもとづいて追及しているところである。検察官「女の子が振り返りへんな目で自分のほうを見たので、女の子を殺して自分のものにしようと思った、という文書を書いたのではないですか。」被告人「今は覚えてないです。」問「記憶もないのですか。」答「そういうことではないです。」問「文書を書いたという記憶はあるのですか。」答「たぶんあると思います。」(略)問「あるかもしれないじゃなくて、あるんじゃないのですか。」答「はい」問「その時、自分の意志でこのようなものを書いたのですか。」答「たぶん、はい」(略)問「(女の子を)自分のものにしたかったのですか。」答「うん、そうなりますね」やりとりからは犯罪を法的に構成しようとする検察官と被告の意識がかみ合っていないさまがうかがえる。

(3) 犯罪の特異性(その二) 行動と精神活動の限局化、強迫的傾向

アスペルガー障害が関わる犯罪では特定の限局された物や事柄に強迫的な関心を持ち、それを追い求める過程で、他の事柄との関連を無視して行きすぎた行動を取ることが多く見られる。前掲の全日空機ハイジャック事件の犯人は少時から飛行機マニアで「ビデオゲームのフライトシミュレーター等に凝り、自分では

ジャンボ機でも操縦が可能であるという自信を持つに至った。」しかし彼にはそれが「実際の飛行訓練によって得られる技術とはまったく別のものであるという当たり前の常識が欠けていた。」それで彼は実際にジャンボ機を乗っ取り、自分で操縦桿を握って東京湾上空を飛行しようとした。(福島 176 頁) この例では、障害者が自分が関心を持つ特定のものに偏執するあまり、現実の諸関係を見捨て、空想をそのまま実現しようと犯行に至ったことがわかる。

自閉症はそれ自体として犯罪的な性格を持つのではなく、犯罪を起こすことも稀だが、起こったときはその特異性が問題だとされている。このことを十一元三氏は、他の精神障害、つまり反社会性人格障害、行為障害などと対比して、次のように整理している。

「通常、“反社会的”という時、社会規範の存在や世間の反応様態について(ある程度の)共通認識を持ちつつ、何らかの理由で意図的に触法等の行為に及ぶ場合を指す。言い換えると“反社会性”という概念には、世の中に対する共通認識、つまり、ある種の社会性が前提として含まれている。一方アスペルガー障害と診断された人が触法行為に至った事例を調べると、殆どの場合動機は“非社会的”ではあっても、“反社会的”であることは稀である。」(前掲 90 頁)

3. 一般人の対人関係

(1) 無自覚の社会性 ソーシャル・スキル

自閉症者の「非社会性」に対する一般人の「社会性」とは何であろうか？ このことを考えるために、「社会性」の内容をより具体的に見てみよう。

磯部潮氏は自閉症の症状として「ソーシャル・スキル」の欠如を挙げている。ソーシャル・スキルとは人が他人と交渉を持つために基本的に必要な諸能力、手際よさであり、さまざまな項目を含む。まずそれは非言語的なものと言語的なものに区別されるが、前者には例えば次のようなものがある。(磯部 79 頁以降から。アメリカの心理学者レバインによるリスト)

- ・挨拶 社会的な場の雰囲気を読み、それにふさわしい行動をとる。
- ・非言語的キュー 視線や身振りで気持ちを伝える。
- ・他人の行動の理解 相手の行動の意味や意図を理解できる。
- ・自分の影響力の認知 自分が他人からどのように思われているか、また自分の存在がどのような影響を与えるかを知っている。

また言語的のものとしては例えば次のものがある。

- ・自分の気持ちを伝える能力 自分の気持ちを誤解されずに正しく伝えることが出来る。
- ・他人の感情を読む能力 他人の気持ちを他人の言葉から読み取ることが出来る。
- ・話し方の切り替え 聞き手の種類によって話し方の切り替えが出来る。
- ・他人の期待の感知 相手が何を知り、何を期待しているのかを知っている。

このようなスキルの諸項目は、一般人が日常の対人接触の場で使っている諸能力であるが、そのことについて人は殆ど無自覚である。せいぜい何かトラブルに直面し、後で反省してその不足に気づいたり、他人の言動と自分のそれとを比較して優劣に気づく程度である。またある対面の場で特に上の諸項目の一つに注意する場合も、その必要性は直観的に知られる。こうした無自覚性は既述の「DSM-Ⅳ」の診断基準からもうかがうことが出来る。(例えば「相手の目を見る」、「顔の表情や身振りを調節する」、「楽しみを他人と分かち合う」などを、いちいちそうしようと意識しながらおこなうわけではない。)

一方自閉症者においても自分がこれらの能力を欠いていることに無自覚であり、その欠如による生活の不都合の意識はないという。(この点が統合失調症との違いとされる。)自閉症児に対する治療(療育)として上のソーシャル・スキルを身に付けるトレーニングを行う場合、彼らはトレーニングの意味を理解するのが困難であり、「どうすればいいのかわからない」という。(磯部 82 頁)彼らにとってそれはもともと不十分に持っていた能力を伸ばすことではなく、一種の飛び越え、飛躍であり、全く見知らぬものに身を預けるような経験であるに違いない。

これらのことから今問題にしている「社会性」とは、一般人の深いところに根づいていて、無自覚的に働く対人接触の能力であることがわかる。

(2) 対人関係の場の「状況」

前述の通り自閉症の障害は「状況の認知の歪み」と性格づけられる。前節の

ソーシャル・スキルの内容から分かるように、対人接触はただ相互に言葉を投げあい、受け取るだけではない。ある言葉はある場合は相手を傷つけ、ある場合は喜ばせる。対話者はこのようなことをわきまえ、相手に予測された範囲のことを言い、また相手が言って来ることを一定の範囲で予測しているのが通常である。対人接触は、直接には言葉で表出されないある状況を持った場の上で行われるのであり、この状況をわきまえていないと、個々のやり取りの意味に気づくことが出来ない。自閉症者が「自分の体験と他人の体験の重なり合いを経験できない」、「行間の理解とか微妙な言い回しなど言語外の意味が理解出来ない」のは、この目に見えない状況をわきまえていないからである。

そこで一般人の対人関係における状況を次のように定式化してみたい。対人関係のうちにある人は、各人がある意味の「資産」を持つとみなされている。資産とは相手の気遣いを受ける権利という、対人関係上の財産、ステータスである。資産の小さい人は大きい人の気持ちや考えていることに気遣わなければならない、このことなしには対人関係の秩序は保たれない。路上ですれ違う見知らぬ人どうしは、いずれも一個人として最低限の尊厳という同等の資産を持つ。しかし一方が不注意で大切なものを路上に落とし、他方がこれを落とした人に教えた場合は、教えた人は落とした人に対してより大きな資産を持つことになり、二人はそれに応じた振る舞いをするように制約される。このような資産の差は一般に、感謝する立場の人とされる立場の人、困って借りる人と貸して助ける人、物を売り込む人と得意先、分配を受ける人と分配を決める人、部下と上司等々の対人関係が営まれる場合の「状況」をなしている。

場のなかで言動する人は、このような資産の差という状況に応じて行うことが要求される。資産の小さい人は大きい人に対して、自分は相手より多く気遣いをすべきであり、より強く制約されているのをわきまえている、ということを示すことが予期されている。しかしまた、小さいとはいえ、自分もまた一定の資産を持つことをも示さねばならない。このような対人関係のルールに従わない者は、社会生活のプレーヤーとしての資格を疑われることになる。他人との資産の差をわきまえた言動をすることによって、人は社会の中での自分の存立を確かなものにする。そのことでその人は自分が社会の連携のネットワークにコミットすることを社会に示すことになる。一般社会で他人の財産、安全を侵すものは秩序を乱す者として罰せられるように、対人関係で他人の資産を無視する者は、社会の連携プレーの中での存立を維持することができない。

自閉症者に欠如しており、一般者が具備しているのはこのような資産の差を知覚し、これに対応して行為する能力ということになる。この能力は認識や推論といった知的能力でもなく、また共感や感情でもないであろう。前述の通り自閉症が脳の器質的な問題に基づくということであれば、一般者のこの能力はそのような特定の大脳部位に関連するような機能であり、幼時から対人接触のなかで発達させてきた、ユニークな精神活動なのかもしれない。

(3) ソーシャル・スキルの問題的側面

ソーシャル・スキルを備えた一般人の対人関係は、このようにして安定した秩序のうちに営まれる。そこには自閉症者の場合のように状況をわきまえない見当はずれの言動、故なく人を傷つける発言などはない。しかしながら一方、秩序の安定があまりにも強く指向される場では、不合理な言動が場の内部で抑止されにくいという危険が生じてくるだろう。上のような意味で秩序が保たれている対人関係の問題として、次のことが挙げられる。

① グループ内部で事柄自体として不合理な言動が行われても、その不合理性が指摘されず、隠蔽される傾向が出やすい。前述の例のように美容院へ行って来た友達に、「変な髪形」といわずに「髪の毛を切ったね」といえば、波風は立たないが、本当に避けたほうがよい髪形の場合であっても、敢えてそれを指摘しないで済ます方へと人を誘導する。

② 対人関係の秩序を保つ作用が働くのは、少人数のグループ内であり、そこに居合わせる人々、緊密な交渉を行う人々などの間である。通常それらの人々は何らかの行動目的を共有しているということも作用して、そのなかの言動は、広く社会一般の観点、普遍的な見地からの判断との間に乖離が生じやすい。

③ 対人関係の秩序はその中の人を無反省に、無自覚的に動かす力を持っているので、理論的な思考や倫理的、普遍的判断との葛藤にもたらされにくい傾向がある。

(4) 自閉症の肯定的側面

一般人の対人関係が持つこのような問題の側面を考えると、自閉症の諸現象は相互的な力の圏外に生きることとして、むしろ一般人が時として反省や自己批判を行うためのひとつの示唆を提供するように思われる。実は自閉症の治療に携わる専門医の間には、自閉症者の状況を単に除去すべき病害とのみ見るのではなく、何かそれ自体として一定の存在価値を持った状態としても見ようとする発言

が多く聞かれる。

酒木保氏は、自閉症児と接していると、一般に人を「分からない」とか「分かる」とか言うのは、物事が自分の思い通りに動いていると思うかどうかを指しているのではないかという思いに駆られる、と述懐している。そして社会全体が分かる、早く分かることにこだわり過ぎていてのではないかと、とも言う。(前掲4頁)これは彼らと接していると共感できるところがあることを実感したことによる感想だろう。藤川洋子氏は自閉症児に対するときは「どうなっているかさっぱり分からない状況に彼らはいる」と思うことにしている、と言う。これは自閉症児に関わる時は、一般人である自分の意識が限定されたものであることを自覚してかかる必要がある、ということだろう。これらの捉え方は、一般の常識に反して、自閉症児の状態が一般人のそれと全く隔絶したものではない、という認識を前提にしている。これは自閉症を一般人と連続したスコープで見るローラ・ウィングの「自閉症スペクトラム」の考え方に符合している。

さらに自閉症者の世界により肯定的な意味を認める発言も聞かれる。先に一般人の場合、五感の刺激は生のままで感受されるのではなく、選択的に受け入れられていることを述べた。一方自閉症者はこのような選択的感受が出来ない(しない)。ということは磯部氏によれば彼らは「私たちが考えもつかないような視点から新たな地平を開く可能性がある」ということである。(前掲34頁)また高岡健氏は「私には自閉症スペクトラムが本当は人間存在の純粹型であり、「正常」とされる人々は純粹型からの偏奇であるという考えがある。」と言っている。(「自閉症スペクトラム」5頁)

自閉症の肯定的意味を認めることは、それが少数とはいえときとして動機不可解な恐ろしい犯罪に結びつくことがあることを考えると、確かに躊躇される面もないわけではないが、自閉症者も一人の人間であるということは勿論、さらに彼らはその地点で経験する感覚や思考がユニークな価値を持ち得ること、その上で彼らは一般社会と繋がるべく努めながら生きていることを考えると、上の専門家の述懐もよく理解できるのではなからうか。

4 業務組織の対人関係と倫理的問題

(1) 業務組織の対人関係の特徴

企業や官庁などの業務組織も対人関係のなかで運営されるが、その特徴は各人が持つ対人関係上の資産の大小が組織規定によって明確に裏づけられ、了解されていることである。判断を行い、他の人をこれに従わせる人の資産は大きく、

従う人のそれは小さい。従う人は判断する人の考えや気持ちを気遣い、それに制約される。これは組織の縦の関係、横の関係いずれも同じである。確かに判断そのものは、ある程度の事情が判っていればどちらの側の人にも出来ることである。もし誰がする判断も同じであれば、このような対人関係上の資産の差による秩序に依存しなくとも業務は行われるだろう。だが判断が難しい場合はそうではない。合理的根拠を明示し得ない中で判断せざるを得ないとき、失敗の可能性が高いのを承知で決定する時、従うものに無理な負担を強いる決定をする時には、上のような対人関係の強制力による秩序に依存しないと、人を従わせることが出来ない。これは、無理な決定が行われざるを得ない職場では、対人関係上の資産の絶対的な差に基づく強い結束を形成せざるを得ないともいえるし、また逆に強い結束を持った職場では無理な決定が行なわれ易いとも言えるだろう。特に企業は厳しい競争状況にさらされており、人材やシステムなどの経営資源で十分に裏づけされていない無理のある決定が行われるのは常態である。このようなところでは前に挙げた「ソーシャル・スキルの問題的側面」が表面化する可能性が考えられる。

(2) 対人関係と社会倫理的問題

現代社会は物やサービスが大量に流通する社会である。一企業の一部門が計画し、決定した製品やサービスの仕様が、企業の実行部門によって大量に生産され、国内外に広く流通する。仕様の計画や決定は通常少人数のグループで行われるが、企業の競争状態の激化から、生き残りを図るための無理な決定が行われることも多い。そのような場合、仕様の段階では顕在化していないが、後に多くの人々によって計画が実行され、また一般消費者の手に渡る段階で計画のほころびを露呈し、人々の安全を脅かしたり、損害を与えたりする危険を含んでいる。これまで述べてきた狭くて強固な結束を持った対人関係の場は、これらの危険が気づかれない、または黙殺されることが起こり易い環境と言えるのではないだろうか。例えば最近ある保険会社で起こった52億円に上る保険金不払い事件がそれである。そこでは経営者には知られないまま、担当部門で「保険金支払いの抑制による会社収益への貢献」ということが自己目的化しており、組織を挙げて不払いの拡大に努力していた。後にこの問題は他の保険会社でも一般的であり、不払い額も巨額に上ることが明らかにされた。また平成17年4月のJR西日本福知山線の列車脱線事故(107人死亡)は、職場の管理が、極度に切り詰められた列車ダイヤを遅延なく運行することに過大な重点が置かれ、それにむけて厳しい従業員教育が行われた結果、安全面がおろそかになり易い状況にあったことによ

るものとされる。このような事件では、計画の内容が社会倫理的に問題を含むことが決定の時に看過されたのであり、その背景には結束の強い対人関係があったことが強く推定される。その他官庁における職場ぐるみの公金流用、公共工事の談合事件、企業経営者の特別背任事件などについても、同様の背景がある場合が多いのではなからうか。

計画したグループが看過し、あるいは黙殺した問題は、後に多数の実行する人々、一般消費者のところで、容易に露呈し、気づかれ、そしてそれらの人々を傷つける。これらの人々はかの少人数の強固な結束の圏外にいる人々であり、その点で自閉症者と全く同じ位置にいる。彼らは結束するグループの内部の「状況」にはまったく関知することはなく、ただその中から生み出された結果だけを手渡され、そして問題に気づく。彼らは変な髪形を見て「変な髪形だ」と指摘する人々である。少人数で物やサービスの仕様を決定する人は、これらの圏外の人々の立場に身を置かなければ、普遍的視野からの倫理的思考を行うことは出来ない。厳しいタスクを課せられて、強固に結束し緊迫した対人関係の中では、そのような思考が座を占めるのは難しいことであろう。(このようなグループも、この計画は社会的に問題にされるのではないか、「大変なことになる」のではないかといった懸念を持つであろうが、それは多分に計画の実行性、フィージビリティという観点からの顧慮であろう。)

先に自閉症者にとってソーシャル・スキルのトレーニングを受けることは、全く見知らぬものに身を預けるような跳び越えの経験に違いないと述べたが、ここでの「圏外の人々の立場に身を置く」ことも逆の方向で同様の飛躍的な判断であろう。それは一般者が自閉症者の心の中を理解することに相当する。結束した少人数の人々にとっては、それら圏外の人々は、「どうなっているかさっぱり分からない状況にいる」わけである。この意味で業務組織の中にある人々が、社会倫理的な視野を持った活動をするために、自閉症の現象には示唆するものがあるのではなからうか？

ⁱ 1944年オーストリアの医師ハンス・アスペルガーが規定した症状にちなんでこのように名付けられた。

ⁱⁱ 現在アメリカの診断基準にならって「広範性発達障害」という言葉がよく使われるが、これは「自閉症スペクトラム」とほぼ同じ範囲である。

ⁱⁱⁱ 磯部潮著「発達障害かもしれない 見た目は普通のちょっと変わった子」光文社新書、28

頁

- iv 佐藤幹夫著「自閉症裁判 レッサーパンダ男の「罪と罰」」洋泉社、48 頁
- v 杉山登志郎著「高機能広範性発達障害にみられる行為障害と犯罪」「そだちの科学①」日本評論社、45 頁
- vi 酒木保著「自閉症の子どもたち 心は本当に閉ざされているのか」PHP 新書、39 頁
- vii 福島章著「犯罪精神医学入門」中公新書、176 頁
- viii 藤川洋子著「アスペルガーと虐待の不思議な関係」「そだちの科学⑤」日本評論社、77 頁
- ix 十一元三著「少年事件・刑事事件と広範性発達障害」「そだちの科学⑤」94 頁
- x 「自閉症スペクトラム」座談会より 批評社、136 頁
- xi 藤川洋子著「少年犯罪の深層 家裁調査官の視点から」ちくま新書、96 頁